暗緑の点より生れて透視図の橋はありたり日傘をの
せて　　岸並千珠子

樹々の繁る中にある橋をうたって見事。カラー写真を見るような立体感が魅力的だ。「透視図」という遠近法にこだわる用語を用いたことで、読者は研ぎあげられた視覚だけの世界にさそいこまれ、下句の「橋」と「日傘」の映像を鮮明にイメージすることができる。

閑(しず)かなり鑓も杓子もしろうまも三つの頂き夕闇(やみ)に聳えて　　尾上宏

白馬三山が夕闇に浮く荘重な姿を、大きくうたった一首。旅の歌ではない。作者が日常的に見ることができる三山を、あらためてクローズアップして見せた今月の一連中の一首。大正・昭和前期に活躍したアララギの歌人・結城哀草果の「群雲は山の腹より湧きいでて蔵王の山はいかめしく見ゆ」(『山麓』)等、生活の場から蔵王山をうたった作を思い出させる。

帰らずの娘ら待つてまち惚け　労(いたは)られるはうの母とはなれず　　花美月

長寿社会になって、年齢はかつての八掛けとか七掛けとか言われる昨今である。まだまだ子供役のつもりでいる娘たち。そろそろ母親役を卒業させてくれてもいいのに、そう思っている母親。今ではきわめて普遍的な現代の親子関係を思わせる。

「割れるからシャボン玉は飛べるの」とフェンスの上を歩く少女は　　星野さいくる

フェンスの上をバランスを取りつつ歩きながら、少女がカッコ内の発言をした、という文脈なのだろう。こう表現されると、少女が妖精のような不思議な少女に思われてくる。ただ、下句にリアリティが足りないのが残念。

雲あつき夕べの空に風わたりほのかにかよふ雨の匂ひか　　梶間和歌

古典和歌の用語にこだわり、古典和歌の音楽を現代に通用させようと健闘している作者である。古典和歌の用語にこだわると意味内容も古い枠組みに吸引されてしまい、なかなかうまく行かない。この歌はしかし「気配」をうたって現代短歌に通用する仕立てになっていて注目した。いま一つ、現代の事物を出す工夫をしてみてほしい。たとえば、「雨」を「信号」とすれば一挙に現代の街の歌になるように、である。

憐れみの声は鱗粉受話器より事務所閉鎖を告ぐる吾へ降る　　倉石理恵

事務所が閉鎖され仕事場が異動する生活上のドラマを、たんたんと表現して読ませる一連にしあげている。上司だった人の名前とかマグネットボードの日付とか、ディテールをていねいに描くことで、大きな人間のドラマを浮かび上がらせている。

ビリビリにしていいものだけビリビリにしながら声をあげて泣く夜　　安野ゆり子

号泣しながらも一部分はちゃんと冷静さを保っているよという、表現するのがかなり難しい場面を、ユーモアをまじえて的確に表現してみせた手腕。

資源ごみの出しそこねたる袋持ち命をかけて見ずと

短歌の現在

No.448　今月の15首を読む

佐佐木幸綱